〈入選〉

科学としぜん

札幌市立元町小三年
大友　直子

今年の春休み、わたしは、つくばの科学はくらん会に行ってきました。すごいはく力で、おもしろかったです。

ロボットが話をしたり、オルガンをひいたり、てんじょうぜん体がスクリーンになっていて、まるでわたしがパイロットになったような気ぶんになったり、たんさていにのって、うちゅうのたびに出たり、科学って本当にすごいなあ、とこうふんしました。

夕方には、てんぼう台にのぼりました。そこからは、会場ぜん体が見下ろせます。まるや三かくや、いろんな形のパビリオンが、きれいな色につつまれて、ピカピカ光っていました。空には、赤やむらさきの、レーザー光せんがかがやき、ドキドキするほどきれいでした。二十一せいきのうちゅうステーションの町は、こんなふうなのかなあと、科学の発たつがますます楽しみになりました。

つぎの日、りょかんで目がさめると、ホーホケキョという、鳴き声が聞こえました。庭は、あかと白のうめの花がいっぱいにさいていて、その花の中で、ウグイスが鳴いていたのです。わたしは、ウグイスの鳴き声は、音楽のようだと思いました。朝もやのむこうには、つくば山がはい色に見えました。そのけしきは、本で見たすみ絵のようで、とてもきれいでした。

わたしは、きのうの科学ばんぱくのこうふんが、まだ頭にのこっていたので、どっちが今、本当のことなのかわからなくなって、少しボヤッとしてしまいました。

その時、「科学の発たつと、しぜんのほごは、はんぴれいなのよねえ」と、お母さんがひとり言を言いました。

「はんぴれいって、何？」と聞くと、お母さんは、わらいながら言いました。「あちらをたてれば、こちらがたたずっていうこと。直ちゃんなら、どっちをとる？」

わたしは、少し考えました。

きのう見た、うちゅうステーションのような町は、すごくきれいだったし、ロボットがいて何でもやってくれたり、ボタン一つでいろんなことができる、というのはいいなあと思います。でも、この庭のけしきも、のんびりして、これもまたいいなあと思いました。かなしいことがあった時、あのキラキラした町では、ますますさびしくなるような気もしました。

道ろが、ぜんぶほそうされると、あそんでいても、ころぶとすぐちが出るし、とてもいたいのです。わたしの家のまわりも、あき地だった所が、毎年少しずつ、たて物がたって、だんだん土の所がなくなってきました。

春には、たんぽぽで、野原ぜん体が黄色くなった所や、夏には、虫をおいかけた所や、冬には、お父さんが、そりすべりの小さい山を作ってくれた所が、今はもうありません。

お母さんは、わたしが小さい時、いつも、「お日さまと、なかよくね」と言って、外につれていってくれました。ちょうちょをつかまえたり、アリの行れつを見たり、いろんな形の石をあつめたり、わたしは、ごはんの時い外は、いつも外にいて、まっ黒になってあそびました。

でも、もし科学が発たつして、わたしの町も、うちゅうステーションのようになったら、外に出ても、新しく見つける物が何もなくて、おもしろくないかもしれません。

それに、家の中でばかりあそんでいると、足もよわくなるし、きんがんになると思います。

べんりになるということと、しぜんをこわさないということと、どちらかをとらなければならないとしたら――。わたしは、今でも答えが出ません。

車は、べんりだけれど、空気をよごします。工場で、べんりな物を作ると、水をよごします。りっぱな道ろをつくると、べんりだけれど木が切られてしまいます。

二十一せいきは、科学の発たつとしぜんのほごが、はんぴれいでなくなればいいなあと思います。そして、そのためには、どうしたらいいのか、わたしは、そのことをこれからも、よく考えていきたいと思います。